

横浜市小学校社会科研究会

3 学年部会

研修会記録

第 1 号

令和4年 7月6日

横浜市小学校教育研究会

会長 徳江 武司

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 岡村 伸一郎

【提案日時】

6月 15日 (水)

提案 本間 宏志 先生 (生麦小)

【会 場】

横浜市立 平沼小学校

司会 岡村 伸一郎 先生 (瀬ヶ崎小)

記録 北沢 宏 先生 (間門小)

1 提案内容 単元名

単元名「わたしたちのまちと市～生麦のまちから横浜市へ～」

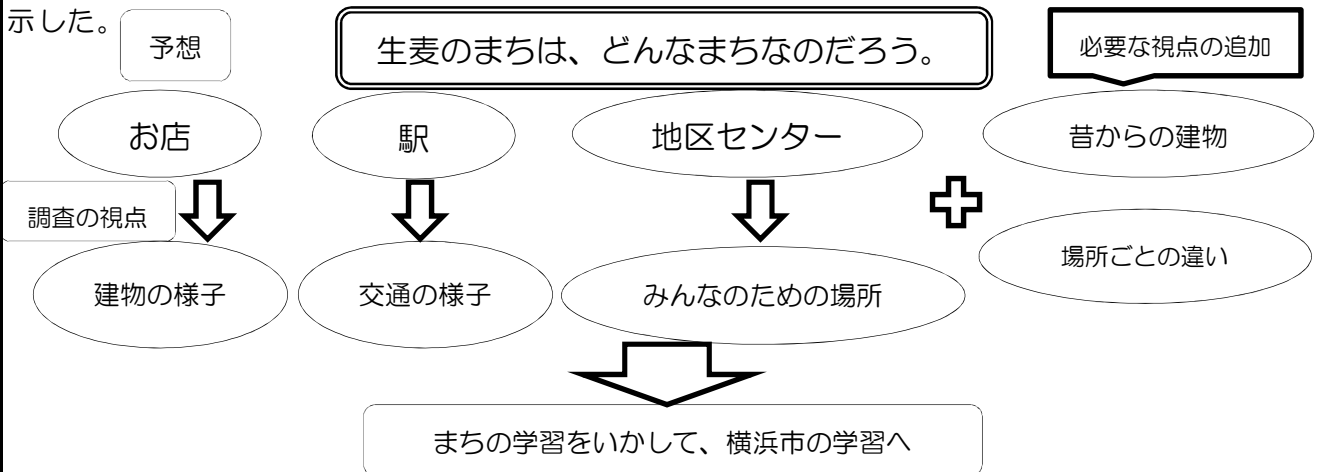
2 提案者より

社会的事象の意味等に迫り、協働的な学びのために、板書の構造化、子どもの発言をつなげる教師の問い返しを大切にしました。場所と場所を比較することが難しく、身近なまちの様子で調査の視点や学習の仕方を学び、横浜市の様子でまちの学習で身に着けた知識や思考を活かしていきたい。地理単元では、事実と子どもの認識のずれを生むような学習問題を設定するのは難しいと考え、本気の学習問題の在り方の工夫を講じた。

視点①

○単元づくりについて

屋上からまちの様子を見る活動から単元を見通す学習問題を成立させた。そして、予想から調査の視点を設定した。「昔からの建物」「場所ごとの様子の違い」の必要な視点は、教師から提示した。



視点②

○比べるための板書の構造化と教師の問い返しについて

黒板全体を表のように見立て、比べ易くした。子どもの考えを子どもの言葉で共有するため、場所と場所とを比べるため、社会的な条件と自分たちのまちとを関連付けるための問い返しを行った。

2 協議会

板書の構造化について

- 地図と板書をリンクさせ、構造的に板書することによって児童の思考が整理させていた。
- 2回のまち調査でわかったことを比較することが難しかった。
 - 調査に行く前に、導入で「2つの地域の様子が違うかもしれない」という視点があれば比べられたかもしれない。

 - 情報量が多い。時数の問題もあるが、1回ずつまち調査をまとめていく必要があった。子どもが認識できていないところは教師が写真で掲示するとよいのではないか。

視点②つなげる問い返しについて

- 子どもの考えをつなげる
 - お店の数が多い、少ないという発言に対して、具体的な数字を問い返すのは必要。子どもの感覚を具体的な数値で共有する必要がある。

- 比べる視点をもたせる問い返し
 - 交通などの社会的な条件と比較の視点をもっている児童C17の発言を取り上げている学習の中で話題になったが、全体で知識として定着していない。比べるための手立てが何か必要なのかもしれない。

<講師の先生より> 日枝小学校 校長 加藤智敏先生

少ない時数の中で合理的に単元を進めていく必要がある。まちの様子を調べに行くときに、子どもに「どうなっているのだろう」という視点ではなく「本当に家が多いのかな」など具体的で批判的な視点をもたせて調査にいくようにしたい。横浜市の様子につながる「まちの特徴の比較」の考え方は、生活科の経験を活かして、特色あるもので比較させられるとよい。

<講師の先生より> 下野庭小学校 校長 黒木英晴先生

教師と児童の1対1の会話になってしまうのではなく、子どもの発言を繋げていきたい。身近な地域と横浜市の単元は、時数が少なくなったこともあり、身近なまちの学習で横浜市の学習につながる視点を押さえ、横浜市で比較できるとよい。例えば、生麦の学区であれば、鶴見川があり比較的土地が低い場所。横浜市の高いところはどのようなところかとつなげることができる。身近なまちの学習で横浜市の学習につながる視点を抑え、横浜市で比較できるとよい。